

獣医学生の「学校獣医師」への意見と質問、そして回答

中川美穂子

全国獣医学生交流会という獣医師を目指している学生の集まりがあります。その全国大会が8月30、31日に東京大学安田講堂で全国6,000名の学生のうち約620名を集めて開催され、各界で活躍している何人もの獣医師が講演し、それを受けて学生がディスカッションしていました。

その最後に、18～24歳までの若い学生（18～20歳が多数を占めた）達に「学校獣医師～心を育てる動物飼育を支援する」を話しました。少ない時間でしたので、さわりだけしか伝えられませんでした。交流会から学生の意見と質問をもらいましたので、簡単な回答とともに、掲載します。若い獣医師の卵の考えに触れてください。

【グループディスカッションで出た意見】

- ・学校獣医師について知らない人が多かった。
- ・学校獣医師の介在によって、動物が嫌いな子も含めた、生徒全体への動物のアプローチを促すことができる。もっと色々な動物に触れ合い、様々な体験ができるように獣医師が学校や児童に働きかけることができればよい。
- ・自分が獣医になったきっかけも小学校のときに学校で動物を育てたから。
- ・触れ合う期間が長ければ長いほど効果は大きくなると思うので、学校でしっかりと触れ合う時間を設ける必要がある。飼育が、作業をするだけになってしまっただけではダメ。動物を飼育する意味を子供にも先生にも理解してもらおう。
- ・飼育係のみでなく学年やクラス全員での飼育という体制が良いと思う。
- ・子供は「死」ということが分かっていないことが多く、獣医師として、生命を助けるだけでなく、「生命」というものを教える大切さがあることが知れた。
- ・実際に動物に触れることで「生命」には温かさがあることを知り、また、動物の体温の変化を感じることで「死」を実感することができる。
- ・動物が死んだ後の子供たちへのケアが大切である。
- ・コオロギやメダカよりも体温がある動物のほうがいい。だが、命の重さは同じということも教えなければならない。
- ・4年生の1年間だけの飼育ではウサギやチャボなどの場合、生～死までは体験できないのでは。
- ・生き物に対して思いやりを持つことができれば、人の死の理解にもつながり、殺人事件を減らせるのではないかと。また、犬猫などの殺処分の減少にもつながる。
- ・休みの日に動物をケアする方法の確立。命に夏休みはない。
- ・触れ合うのは幼稚園や小学校低学年からやってもいいのではないかと。
- ・講演のスライドで出た子供の描いた動物の絵の変化が印象的だった。心理学的に分析してみれば様々な結果が出そう。教育の成果が分かりやすく現れている。
- ・子供に理想を押し付けないようにすることも必要だと思う。必ずしも全員が思い通りに動物を可愛がり命を大切だと思うわけではないことを忘れがちなのでは。
- ・子供たち同士のコミュニケーション能力の向上や下の学年への引継ぎなどによって様々な効果も期待できる。

- ・小動物に関すること以外に、大動物食) に関することも正しく知ってほしい。
- ・学校の意識改革と獣医師の説明による支援が大切である。
- ・先生に対する講義や指導を定期的にもっとすべき。
- ・たとえば猫を拾ってきた場合、その猫を「元の場所に戻してきなさい」とだけ先生が言ったという話がある。なぜ飼えないのか、生命に対する責任など、先生にも考えてもらいたい。
- ・学校の先生が免許を取る際に動物や公衆衛生について勉強する機会を設ければよいのではないか。
- ・教師の負担を増やしすぎると広まらない。
- ・親に対する説明や理解を得るために獣医師のサポートが必要である(専門知識)。
- ・アレルギーに対する不安や抵抗感がある。
- ・動物をいじめて遊ぶ子には親や周りの大人が教えないといけないが、親の知識がないと子供にも教えられる。親が動物嫌いだと子供も同じようになる可能性が高いとい考えられるので、親にも体験してもらう機会があると良い。たとえば参観日などを使って。
- ・子供の教育はもちろん、地域の交流などもできる。
- ・複数の講演で共通して思ったことは、保健所と獣医、環境保護者と獣医、教育者と獣医など、獣医と他の機関との連結が大切なのだと感じた。
- ・学生のうちから獣医学の勉強だけでなく子供が動物に接してどう感じるのかも考えていくことが必要。そうしていくことで将来支援していくにも子供目線での説明ができていく。
- ・開業したときに学校獣医師をやってみたい人が多数だった。これから副職だけでなく学校獣医師を専門としてやっていく

人も出てくるかもしれない。学校に獣医師が常駐する。

- ・一人の獣医師が何校か掛け持ちすれば十分である。
- ・大学でも子供に動物と触れ合う機会を提供したいと思った。
- ・アメリカでは色々な施設に行き、動物に触れ合う機会を増やしている。ボランティアとして動いてみたい学生はたくさんいる。将来その方面に熱心な獣医師が増え、広まるのでは。
- ・もっと教育関係者に知ってもらい、獣医学科の学生にも知ってもらう必要がある。
- ・身近に動物がいるのはとてもいいことだし、そこに獣医師がいるというのはとても良い社会貢献だと思う。
- ・動物の良さだけでなく怖さも学べる、獣医師がその危険性なども伝えていくべき。

【質問と簡単な回答】

Q：学校獣医師に何がどこまで求められているのか、漠然としている。獣医師と学校の先生の役割は？

A：教員は年間の教育課程に従って、授業を行う。獣医師はその先生の考えに従って、動物飼育を介在する授業などについて、助言と支援を行う。具体的には、春の飼育導入授業を支援し、2学期に子どもたちの質問に答えるが、ほかに、動物の飼育方法やトラブルの相談に乗る。しかし、先生は飼育動物のことはよくわからないので、獣医師から気づいたことを助言し支援することが求められるかも。

Q：獣医学生として学校獣医師に手伝えることはありますか？

A：将来、開業したら近くの小学校や幼稚園から頼りにされるので、子どもへの語りかけなどになれるために、現在学校にかかわっている獣医師の手伝いするのは

良いと思うが、多くの場合、週日に授業支援が行われるため、どこの開業獣医師の手伝いができるか、相談すると良い。具体的には、どの地域獣医師会がどのような状況か、どの獣医師がかかわっているかなどについては、本会に問い合わせてみて欲しい。

Q：獣医師が学校で「食育」にかかわっている例はあるのでしょうか？

A：調査はないが、頼まれれば畜産を職域に持つ専門家として授業で話していると思う。私自身も、なぜ卵を毎日世界中で食べられるか、などを話している。余談だが、野生動物、外来動物についても小学校で話すことも大事だと感じている。

Q：「親の背中を見て子供は育つ」とありますが、親への講演などは行われているのですか？

A：学校や幼稚園、あるいは教育委員会や幼稚園の団体が保護者向けに講演会を準備している事例も見られる。教育者も保護者を育てることに腐心していると思う。

Q：保護者の目が近年厳しく、動物を飼うのが困難であるという現状があると思うのですが、その点についてどう思いますか？

A：これは各地で、学校や獣医師、教育関係者が努力していること。学校に獣医師が入ること自体困難だったが、各地の獣医師の優しさと熱意が現在の状況を作ってきたといえる。人生はこれだから面白い。

Q：学校獣医師を広めていくうえで苦労した点は？

A：社会、教育関係者、議員、獣医師会、そして獣医師の理解を得て広めること。説得のための、「学校の動物飼育の教育的な意義」を集めて広めること。実は、獣医師は、遊び以外で病院を留守にする

ことを嫌がる傾向が強く、また獣医師が学校にかかわっても、学校は変わらないことで、獣医師が傷つき、更に心が硬くなることの考慮と対策。「社会の中の獣医師」への獣医師による理解を広げる。

Q：どうやって学校獣医師を確保するのですか？

A：これは獣医師会と自治体の約束で、開業獣医師会員が近くの学校の相談相手になるということで、

確保する苦労はないが、やり方を知ってもらうために、各獣医師会は、教員向け研修と獣医師向け研修会を開いている。

Q：学校獣医師はボランティアでやっているのですか？

A：自治体と連携事業のあるところは、事業費が入るが、それでも獣医師会の社会貢献の部分で、ボランティアといえる。つまり英語で「意義を感じて努力する人」をボランティアと呼ぶとおりである。

Q：自治体から要請されても断る獣医師がいるのでは？

A：東京都獣医師会の中に、教育委員会から課長が出向いて頭を下げたのに、頭から断った支部がある。開業獣医師は地域に根ざして社会に溶け込んでこそ一生安泰なので、これは驚くべき事例と考えられている。その方々の子どもは、小学校に世話にならなかったのだろうか？これ以後、この地域では、「獣医師の地位向上」などについての行政との話し合いのときに、障害になることが心配されている。

Q：アメリカなどの海外では日本のような学校獣医師はいるのですか？

A：今のところない。ただ、愛護グループが犬などの小動物をつれて学校を訪問することがあり、そのときに獣医師は動物の健康管理をするくらいだと聞いている。

Q：なぜ学校獣医師をやろうと思ったのですか？

A：自分の子が小学校に通いだしたときに、悲惨な飼育に気づき、また小学生が教員の対応に疑問を感じ、苦しんでいると知ったとき、獣医師以外のだれが改善できるだろうと感じたため、目の前の動物と子どものために、今、獣医師である自分が動くべき。今やらずにいつやれる！

Q：土日の世話が困っていると言っていました、実際どうしているのですか？

A：警備員、近所の人などに頼むこともあるが、一番多く見られているのは、金曜日に大目の餌と水を与えて月曜日まですごさせること。水をこぼしたなどの事故が起こり、休みに死ぬ事例が多い。本来は、「命を教えるための動物」だから、休みも子どもにかかわらせ、それを保護者がサポートするのが一番。親子当番では、あちこちで親子の良い会話がうまれるなど好影響が報告されている。

Q：学校で飼育している動物に子供が危害を加えられた場合の対処方法は？

A：深刻な事例、特にチャボとウサギの飼育では聞いたことはない。ヤギなど頭突きするときには、それ相当の用心をしているようだ。ハムスターに噛まれることはあるかもしれないが、そのときは養護教員が対応し、ひどい場合は受診するように伝えている。獣医師は、事前に対処法を知らせておくのが良いが、動物は人を怖いから噛むので、怖がらせないでと、聞かせたい。

Q：殺処分される動物を小学校で飼うという意見が出ましたが、先生はどう思われますか？

A：反対。小学校は子どもの教育のためにあるので、何を飼うか（飼育が簡単で、

比較的寿命の短い小型哺乳類やチャボなどを教育的見地から選ぶべき。また教員は移動するため、犬の飼い主が決まらないので、犬が不安になり、人に危害を加える危険がある。学校には不安定な犬をしつける業務はないし、夜は無人の学校においておかれて、飼い主がいないのでは、犬がかわいそう。それに全国の小学校は3万くらいしかない。数からも一年間に殺処分される犬を救うシステムは成り立たない。

Q：学校で家畜の飼育をして、最終的にその個体を食べるというところまで行う教育についてはどう思われますか？

A：安易にやるべきではない。中学校でウニを幼生から一人一匹づつ育てて、3年目には数センチになった事例がある。当初は食べる目的で始めたが、うに太郎などの名前もついて、myウニ状態になって3年目、校長も担任に「食べるさせるなよ」と心配しているとか。子どもたちも初期の目的は、長い間にどこかにやっけてしまっけて「海に放す」計画に変更している。中学校でもこの状況だから、小学校においておやであり、大事なものは愛情の行方といえる。小学校での飼育の教育は、子どもたちに、まず弱いものを庇い愛する感情を構築するために行われている。また、子どもは心から愛情をかけて「動物の親」の気持ちになってしまうため、食育と絡めて、「我が子を食べろ」とは教えるべきではない。家畜の活用は、農業高校で専門家の指導のもとに行うべきでだろう。専門家のいないところで安易にやると、子どもたちに不必要な一生のトラウマを与えてしまう危険が大きい。

(全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)